

<紹介>重友毅著『近世文学史の諸問題』松田修著『日本近世文学の成立』

著者	杉本 圭三郎
雑誌名	日本文学誌要
巻	10
ページ	72-74
発行年	1964-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019089

〔紹介〕

重友 毅 著 『近世文学史の諸問題』

松田 修 著 『日本近世文学の成立』

杉 本 圭 三 郎

このふたつの書物を前にして、いささか、ためらいを感じないわけにはいかない。ひとつには、私が、在学中、講義で、ゼミで接した程度にしか、近世の文学を読んでいないので、書評の資格をもっていないからだ。そこで、批評の域にふみこむわけにいかず、単に紹介することにとどめた。また、扱われた時期の相違はあるにしても、同じ近世文学を対象として著者の文学観、文学把握の方法の相違が、きわだって対照的で、同日の談を困難にさせているからだ。両著をならべて紹介するにしても、比較めいたことは一切行わず、それぞれについての感想をしるすことで、責めをふさぐと思う。

重友教授は、私が本学入学以来薫陶を受け

てきた先生のお一人である。はしがきで述べておられる「先年『日本近世文学―展望と考察』と題する一書を世に問うてから、すでに十年に近い歳月が経過した」、この十年の期間、重友教授の所説を直接うかがう機会を得てきた。「近世文学史の諸問題」に収められた諸論稿は、それだけ私にとっては馴染のかいものとなっている。

重友教授の言われるように「常に作品を中心に、その文学的意義を究める」（はしがき）とが文学研究の本道であるとするなら「われわれの学界に、長く文学疎外の日がつづいたことは、むしろどろくべきことがらであった」（同）といえよう。文学にとって非本質的な周辺の諸事実への詮索がいわゆる国文学界

の大勢をしめているからである。

重友教授も指摘されている「文学的意義を究める」といふ点には、研究主体の感受性、方法、思想、その他人間的な存在そのものの一切が投入されることとなり、「本質に探り入ること」はまことに「至難」である。従って研究業績はそのまま研究者の人間的ありようを語ることになるのである。本書もまた行間に教授の人柄がにじみでているといえよう。

まず冒頭に「近世文学の特質」と題する一文において、文学史の時代区分の問題から近世とよぶ時代の特性を考察し、近世文学に対する教授の基本的な考え方を主張されたいえで西鶴について「西鶴の生涯」「西鶴諸国咄二題」「好色五人女の本質」の三論文、芭蕉関係では「猿蓑における諸問題」、近松には「曾根崎心中の根本問題」「近松の政治批判」が収められている。頁数からいって本書の三分の一近くを占めるのが秋成に関する論稿で「秋成と怪談」「『白峯』と『血かたばら』」「雨月物語評論」四篇「春雨物語評論」三篇といずれも具体的な作品論が展開する。作家、作品論では、ほかに「風来山人の戯作」「膝栗毛について」があり、読本総体の論究として「読本の発生と展開」があって、史的

に概観されている。

重友教授の古典文学観、古典研究の意義についての見解は、以上の論に具体化されているが、直接的なたちでその問題を論じられたのが、「古典の本質」「古典研究の意義」の二論文である。ここでは、古典研究の現況に対する批判が述べられており、重友教授の立場を明瞭に看取することができる。

巻末には「鑑真和上坐像」「秋成の遺跡」「一茶の郷里を訪ねて」三篇の随筆がそえられている。いずれも二、三頁の短篇だが、研究生生活の余滴としてしるされたものである。

かつて教授は国文学関係の某書の書評で、その晦渋な表現を批判されたことがある。高度に理論的な問題を平易に表現するのは、極めて困難なことだが、文体はまた研究そのものを語ることになる。重友教授の著書の文章の分りやすさは、特徴といえるであろう。

× × ×

文学史における近世初期は極めて魅力的な季節のひとつである。それは、個々の作家、作品の世界の大きさのもつ魅力でないことはいうまでもない。中世から近世への過渡期、新しい文学の創成期としてのそれである。松田修氏の「日本近世文学の成立」は、主とし

て仮名草子の作家を分析して、近世初期文学の問題に迫っている。「『近世文学史の成立』を研究課題としてなぜえらんのか。その理由は、ひとえに近世初期―織豊期から元禄前後―が典型的な変動期である点にかかっている。変動期はいつの日も魅惑的である。頽廃と生誕、発展と挫折、それら急激な流動と交錯にこそ、負にも正にも、「人間のすべて」が顕現するのではあるまいか。」―自序の冒頭から、研究者の主体性がたかなり、本書を一貫している。きわめて主体的な発想、姿勢が持続して、近世文学成立過程の問題が検討されていく。―異端の系譜―というサブタイトルが明示するように、著者の思考も国文学の正統から超脱している。そこに本書のユニークな達成があるといえよう。

本書のテーマのひとつに、かぶき精神の解明がある。そしてこの点に最も明瞭に、著者の主張の特異性がうかがわれるのだ。「今日『かぶき』といえば直ちに芸能としての歌舞伎を思い、かぶき者といえばそのままに、その最初の典型として名古屋山三郎を連想する。その連想はたしかに正しい。しかし、その正しさを超えて、私はなお山三郎の前に、さらに大きくさらに逞しい、つまりより本質

的なかぶき者の典型として、豊臣秀吉をあげねばならない。」として「秀吉におけるかぶき」を追究し、さかのぼって織田信長に「最初のかぶき精神の顕現」をみようとする。そして「たとえそれが、真実の解放でないにせよ、一度は体験しえた織豊政権の一面としての自由奔放さが、徳川政権による封建体制の確立とともにその手足をもがれてついには窒息する、そのいたましい過程が、秀吉から山三郎、あるいは一兵衛に至るかぶきの精神なのである」と説かれ、「かぶきは第一義から第二義へ、さらには第三義としての芸能歌舞伎の意味に変化している。すなわち、三通りの変質と変貌をとげている。そして近世がともかくも継承しえたのは、第三義のそのみなのである」と、通説のかぶきを位置づけ、出発点において既に運命づけられた近世文学の未来を占うのである。著者はしばしば、「すくなくならず奇矯であるとしても」とか「やや奇矯な表現ながら」と読者の反応を顧慮しながら、大胆なものいをおすすめて、「かぶき精神こそ、日本の近世がもちえた可能性のシノニム」であるとし、一代男の論に至って「近世『町人』階級における歪曲されつつも蓄積されたエネルギー、かぶき精神の、好

色面における文学的爆発が、『好色一代男』であり、世之介はその具象化である」ゆえんを説くのである。

信長記、太閤伝説、木下長嘯子など、単に未開拓の分野に歟を入れるといった程度のものでなく、すぐれて批評的な照射によってとらえられており、興味ぶかい研究となっている。

「仮名草子とその作家たち」では浅井了意、江島為信、中川喜雲の三人が考察の対象となり、とくに浅井了意に対する評価は積極的である。了意を論ずる著者の筆鋒は熱気を帯びている。仮名草子から浮世草子への展開の通説を超えて、『浮世物語』を再検討しながら、その「批判的リアリズム」（という用語の適否がいささか問題だが）喪失を代償として浮世草子の文芸性が成り立っていくことの意味をきびしく問いただしていくのである。

江島為信の項では、その生涯を年譜考証のかたちで辿り、作家としての終熄をみとどけ、中川喜雲では名所記の実用性と文芸との岐路を探る。いずれも近世初期文学の本質とかわる問題である。

かくして論稿は、元禄の文学にすすみ、西鶴、近松が俎上にのぼる。「かぶきの美学」

からする一代男論評は既にふれたが、「心理や性格のロマネスクへの展望」を可能としなるところに西鶴の限界をみ、趣向性への傾斜に近松の挫折を説く。

本書を通じて、近世文学は成立の時点で挫折の方向にのめりこんでいくという印象を強くうける。元禄文学の手放しの評価は今日、通用しないであろう。挫折点を明確に把握しておくことは、批判的研究の基礎である。それは充分認識したうえで、なお、積極的な意

△書評▽

国語教育の指標・人生の道標

鈴木敬司

古田 弘 著 『授業における問答の探究』

国語教育界には尊敬すべき実践家や理論家は数多くいる。が、それらのかたがたのほとんどは「や」という並列助詞で並べたように、

「実践家」か「理論家」のどちらかに分かれてしまう。ところが、この本の著者は、国語教育の理論と実践とをみごとに統一されている数少ない存在である。本書が、

味をみいだすとすれば、近世初期から元禄への「発展」の正の側面にも著者の鋭い分析がさらに加えられたら、と思う。

文学本来の在野性をときあかすにふさわしい、著者の非官学的精神にいろどられた、興味ぶかい研究書として本書を読んだ。

近世文学史の諸問題・明治書院刊・価一五〇〇円、日本近世文学の成立・法政大学出版局刊・価九八〇円

——法政大学文学部講師——

理論書としての価値と、実践の手引書としての価値とを併せもっている秘密はここにある。著者は、実在する国語教師群を次のように分類されている。

「一 一応の理論はいえる。

二 一応の理論はいえるが、教材を見る目は浅い。

三 一応の理論はいえ、教材を見る目もできてはいるが、じっさいの授業にな